

研 究 報 告

第 15 号

- 『ブデンプロック家の人々』試論 …………… 伊 藤 白 (1)
—「市民と芸術家」の生み出す四つの類型から—
- アルトゥール・シュニッツラーの『自由への道』 …………… 池 田 晋 也 (29)
—市民的なものと芸術家的なものあいだを浮遊する生—
- カフカの息子たち …………… 川 島 隆 (45)
—短編「十一人の息子」読解—
- ヘルマン・ヘッセの『シッダールタ』について …………… 中 原 香 織 (71)
—葛藤の不在がもたらす問題をめぐって—
- 日常の「ヒーロー」 …………… 羽 坂 知 恵 (97)
—ハインリヒ・ベルの『道化師の意見』について—

2001

京都大学大学院独文研究室

『研究報告』バックナンバー

第1号(1985)

- 大川 勇: ある深層の物語の読解 — ムー
ジルの『特性のない男』研究のための序説 —
金子 孝吉: リルケの詩『偶像』について
田辺 玲子: 関係世界の創出 — アネッテ・
フォン・ドロステ=ヒュルスホフの詩人像とそ
の世界 —
奥田 敏広: トーマス・マンの「モンタージュ技
法」について — 小説形式のパロ
ディー —

第2号(1986)

- 松村 朋彦: 心理学と小説のあいだ — カー
ル・フィリップ・モーリッツ『アントン・ライ
ザー』とその周辺 —
大川 勇: 千年王国を越えて — ムージルの
『特性のない男』における〈別の状態〉の行
方 —
加藤 丈雄: 『公子ホムブルク』につい
て — 死の恐怖とその超越を中心に —
奥田 敏広: リオン・フォイトヴンガーの小説
『成功』におけるヒトラー像について — 20
年代の証言の一つとして —

第3号(1988)

- 加藤 丈雄: ハッピーエンドと悲劇 — 『公子ホ
ムブルク』の多義性について —
兵頭 俊樹: ヘルダーリンの‘Wie wenn am
Feiertage...’に現れるディオニュソスの形
象をめぐって
竹本 まや: トーマス・マンの『すげかえられた
首』試論
友田 和秀: 『魔の山』試論 — 主人公ハンス・
カストルプの形姿をめぐって —

第4号(1990)

- 津田 保夫: 『ヴァレンシュタイン』試論 — ネメ

シスの悲劇の観点から —

- 千田 春彦: フライダングの『ベシヤイデンハイ
ト』研究のために — 三つの《はざま》をて
がかりとして —
宮田 眞治: 覚醒へ向けての夢想 — 『ハイン
リッヒ・フォン・オフターディンゲン』試論
(1) —
千田 まや: トーマス・マンの『ファウストゥス博
士』 — デューラーの機能についての一考
案 —
斎藤 昌人: 「カフカ像」 — 『流刑地にて』を
めぐって —

第5号(1991)

- 青地 伯水: ホーフマンスタールの『厄介な男』
における「なおざりにされた生」と「達成され
た社会性」
谷口 栄一: C. F. マイアーの『ユルク・イェナッ
チュ』について — その多義性に関する一
考察 —
津田 保夫: 後期シラーの悲劇論に関する一
考察 — 悲劇的恐怖の概念を中心に —
斎藤 昌人: 閉ざされる世界

第6号(1993)

- 片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『ラデツキー行進
曲』 — 「比較」と「繰り返し」のモチーフを
めぐって —
千田 春彦: デア・シュトリッカーの『閉じ込めら
れた女房』について — 物語の重層構造
の目指すもの —
福田 覚: 自然模倣説における真理媒介の構
造(1) — レッシング〈詩学〉に潜在する模
倣説の輪郭 —
青地 伯水: W. ヒルデスハイマーの『リープ
ローゼ・レゲンデン』におけるグロテスクなも
のについての一考察

第7号(1994)

飛鳥井 雅友: 「しばしばそれは絶望的な対話
なのです」 — パウル・ツェラーンにおける
対話の概念をめぐる —

吉田 孝夫: 時間の渦 — R・M・リルケ『新詩
集』の数篇から —

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『右と左』 — 二
つの方向 —

第8号(1995)

濱中 春: シラーの『マリア・ストゥアルト』 — 二
人の女王のドラマ —

中村 直子: 分離動詞の認定をめぐる諸問題

飛鳥井 雅友: 神学の拒否と詩学 — パウル・
ツェラーンにおける神義論の問題 —

第9号(1996)

中村 直子: 正書法と分離動詞

濱中 春: シラーの『ヴィルヘルム・テル』におけ
るスイスの風景

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『百日天
下』 — ヨーゼフ・ロートのワーテルロー —

飛鳥井 雅友: 「胸は張り裂け」 — ゴットフリ
ト・ベンの場合 —

第10号(1997)

濱中 春: シラーの『逍遙』における風景をめ
ぐる — 風景の補償モデルとその矛
盾 —

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓
話性(1) — 散文小品『通り(I)』につい
て —

片桐 智明: 物語の行方 — ヨーゼフ・ロート
の『果てしない逃走』と『カプツィン派教会納
骨堂』をめぐる —

第11号(1998)

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓
話性(2) — 放蕩息子をめぐる二つの散文
小品について —

片岡 宜行: ドイツ語の与格の分類について

國重 裕: クリスタ・ヴォルフ『クリスタ・T への追
想』について — その語りの構造 —

飛鳥井 雅友: ゴットフリート・ベンにおける(抒
情的自我)概念の登場をめぐる

第12号(1999)

片岡 宜行: ドイツ語の与格と空間補足語につ
いて

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーの絵画描
写について — エクブラシスの観点か
ら —

片桐 智明: ハイミート・フォン・ドレーダー四十
歳の小説 — 『最後の冒険』、騎士とドラゴ
ンの小説 —

KUNISHIGE Yutaka (國重 裕): Zwischen
Phantasiewelt und Wirklichkeit —
Essay über Ilse Aichingers „Die
größere Hoffnung“.

第13号(1999)

KUNIEDA Naotaka (國枝 尚隆): *Wilhelm
Tell als ästhetisches Projekt.*

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける通
俗小説とメルヘンの再話について — 対
句法に関する試論 —

第14号(2000)

廣川 智貴: 文体論の理論と実践 — クライ
ストの『ロカルノの女乞食』を例にして —

佐々木 茂人: カフカの作品における歌のモ
ティーフ — 『歌姫ヨゼフィーネ、あるいは
ネズミ族』を中心に —

國重 裕: オーストリア小説に見る《家族ドラマ》
の変遷 — M.シュトレールヴィッツ『誘惑。』
(1996)

INHALT

ITO Mashiro:

Versuch über Thomas Manns »Buddenbrooks«

—Vier Typen von »Bürger und Künstler« (1)

IKEDA Shin'ya:

Arthur Schnitzlers Roman »Der Weg ins Freie«

—Das zwischen dem Bürgerlichen und dem Künstlerischen hin und her
schwankende Leben (29)

KAWASHIMA Takashi:

Kafkas Söhne

— Eine Deutung der Erzählung *Elf Söhne* (45)

NAKAHARA Kaori:

Über Hermann Hesses »Siddhartha«

— Das Problem der Konfliktlosigkeit (71)

HASAKA Chie:

Der »Held« im Alltag

— Zu Heinrich Bölls »Ansichten eines Clowns« (97)

研究報告 第15号

非売品

2001年12月発行

発行所 京都大学大学院独文研究室
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内
郵便振替 01060-2-38520

印刷所 北斗プリント社
〒606-0864 京都市左京区下鴨高木町
38-2